
突然トリップ inヴァンパイア騎士

蓮華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

突然トリップ in ヴァンパイア騎士

【Nコード】

N1991Y

【作者名】

蓮華

【あらすじ】

ふと、目が覚めたら知らない場所にいた。

しかも体は縮んでいるし吹雪の中だしここはどこ！？って感じだけどそこで出会った子供を見た瞬間ここがどこかわかった・・・。

なんでここにいるのかもわからないけどなんとかなるでしょ！！

これは「ヴァンパイア騎士」のトリップ小説です。

幼児化してますが、すぐに大きくなります。

注意：名前変換はありません。固定です。

いっは・・・どっ？（前書き）

よろしくおねがいします！

じっは・・・どっ？

私はごく普通の学生だった・・・。

ちよつと人と違うことといえば人と違う事が出来る。一部では「陰陽師」「言霊使い」などと呼ばれたりしていたが

後は普通のどこにでもいる漫画やアニメが好きな普通の学生だった。

そりゃあ自身が普通じゃない力を持っていたわけだからそれなりの「不思議」は現実にあるんだろうな。

くらいは思っていたよ？

だからって・・・こんな規格外もいいところだよ!?

私は気がつくと白い白い世界にいた。

いや、ようは雪空の中にいただけなんだけどね!

なんでここにいいのかわからない・・・。

さっきまで部屋のベットで暢気に漫画を読んでいたはずなのに気づいたら雪の中って・・・!!

誘拐!? 人攫い!? まさかついに捨てられた!?

いやいや、いくらなんでもそれはないよね、うん。

雪の中で呆然としていると冷たい風が肌を出して思わずブルツツと

体を震わした。

あまりの寒さに腕を両手で擦るとふと違和感を感じた。

じいじは・・・

・・・？

なんか変・・・。

自身の体を見ると何故かいつもより小さい気がして・・・

「ってはっ！？」

急いで自身の両手を見ると記憶の中にある自分の手よりかなり小さい事に気がついた。

急いで自身の体を見るとやはり小さくなっており・・・な、な、な
！！

ち、小さくなってるーーーー！！？

「な、な、なにがどうなってるのー！！？」

その声もどこか幼かった。

頭がパニックになる。

まずは、落ち着け！落ち着け！はい深呼吸！！

スーハー スーハー・・・。

「・・・まず、状況確認が大事よね・・・」

私はさっきまで、部屋で漫画を見てて、気づいたらここにいて・・・。

んで、目が覚めたら体が小さくなっていた。

鏡がないからわからないけど、恐らく5歳ぐらい？だと思う。

・・・ということかな？

って全然意味わかんない・・・。

「とりあえず・・・ここにずっといたら私 凍死するわな・・・」

さつきから冷たい風が吹いてきて体が震える。

体が寒いし誰かくる様子も全然ないし、とりあえず歩くか・・・。

そのうち誰かに会つかも・・・というか会えたらいいな・・・。

そんなことを考えながらゆっくりと歩き出した。

ザクツザクツと自身の小さい足を進めていると小さい何かの影が見えた。

「っ！？誰がいる！？」

助かった！！とその誰かに向かって急いで足を進めるとそれは子供でその子供の目の前には大人と思われる誰かがいた。

だけど、その人の様子が変わる。人の気配がしない・・・！

「駄目っ!!」

私はその子に駆け寄って庇うように抱きしめた。

子供に長い爪の手を伸ばそうとしているこの不気味な存在から・・。

ギョツと目を粒って衝撃を耐えようと歯を食いしばっていると
後ろから何かを切り裂くような音と共に悲鳴・それに何かが倒れる
音が聞こえた。

「・・・?」

静かになって不思議に思いそつと後ろを振り向くとそこには綺麗な
漆黒の髪にダークグレイの瞳を持つ少年。

少年の足元には少年によって倒されたと思われるモノがいてソレは
サラサラサラと

灰になって塵になって消えた。

そして少年の手は今消えたソレを攻撃した時についた血が付いていた。
た。

少年はこちらを向いて・・・私を見て何故か一瞬目を見開いた。

だがすぐになんともなかったかのようにその手に付いた血を舐めながら言った。

「大丈夫？」

私と私に抱きしめられていた少女はその少年を見るだけしか出来なかった・・・。

私はこの二人を見て・・・理解した・・・。

ここは・・・。

「ヴァンパイア騎士」の世界なのだと・・・。

吸血鬼と守護係

あの後

私は警戒されると思ったけど何故か枢に警戒されることもなく子供：優姫と共に少年：枢に黒主灰闇の元に連れられた。

理事長（って言ってもまだ理事長じゃないよね？）は私の搜索届も出したが何も音沙汰もなかった・・・当たり前だけど・・・。

結局、優姫と一緒に理事長の養女として迎えられた。

小さい優姫がもう可愛くて可愛くて仕方ありませんっ！！

もうやることなすこと可愛くて可愛くて！！

枢もまだ小さいのにかっこいいのよ！！

だけど優姫に甘いのはすでにこの時変わらないようで理事長に何度にかからかわれて家に来たことか・・・（笑

・・・思うんだけど枢が将来あんな性格になったのは理事長にも原因があると思うんだよね！

それから零がやってきたり色々あったけどなんとか十年何事もなくすごした。

それから十年・・・。

私と優姫と零は黒主学園に通っています。

今日も理事長に頼まれた守護係ガーディアンのお仕事頑張っています!!

宵の刻―「月の寮」前。

今日も普通科「ディクラス」の生徒が我らが麗しの夜間部「ナイトクラス」に会うべく月の寮の正面前に集まっていた。

それを抑えるのが私ら守護係「ガーディアン」の仕事である。

「はいはいー下がって下がって！ ディクラスの皆さんはもう門限ですから寮に帰って」

「危ないから、ほら下がって！」

優姫と一緒に頑張って生徒を抑ようと頑張っているがそんな事でこの生徒が落ち着くわけもなく。

「どきなさいよ風紀委員!!」

逆に押し通しこうようとする始末・・・。

なんとも彼らに会おうとする女の集団とは怖いものである。

その時ガシャンと音が響いた。

彼女らに取っては最高の瞬間がやってきてしまったのである。

「きゃあっ・・・」

「あれ・・・！」

生徒が何故こんなにも大騒ぎになるのかと言うとそれは・・・。

ナイト・クラスがエリート集団であり、美形の集団だからである。

彼らは全員吸血鬼である。もちろん普通の生徒はそのことを誰も知らない。

知っているのは理事長と私と優姫と、そしてサボってここにはいない零だけである。

守護係としての仕事

「おはようー女の子達！今日も元気で可愛いねえ」

あーあ・・・。

私ははあっとため息をついた。

優姫を見ると藍堂先輩に呆れた顔をしながら立っている

と。

「「「「「きゃーーーーー！！」」」」」

ドンツと興奮した生徒達によって押された優姫が前のめりに倒れた。

「優姫！！」

優姫に駆け寄ろうとすると枢が優姫の傍にいた。

「大丈夫かい？優姫。いつもご苦勞様」

「枢先輩！！」

優姫は驚いて顔を赤くすると急いで立ち上がっていた。

「はい・・・大丈夫です！」

そんな優姫に枢はくすりと笑う。

「君はいつも僕に畏まっているね。少し寂しいな・・・」

優姫はそれに慌てて手をブンブンっと振りながら答えた。

「あつ・・・いやっ・・・だって、枢先輩は私たちの命の恩人ですから！！」

その時、ようやく優姫の元にこれた私は優姫に怪我がないか確かめてホッ息をついた。

「良かった。優姫怪我はないみたいだね」

「うん。大丈夫。ありがとう蓮華」

枢に向き直ると枢は私たちを見ていた。

「枢先輩・・・お久しぶりです。それからありがとうございます」

「どういたしまして。二人とも気をつけてね。それから優姫、昔のことなら気にしないでいいんだよ？」

そういつて優姫の頭を撫でている枢の手をぐいっつと突然割り込んできた零がその手を掴んだ。

つて、急に割り込んできてなにやってんのよ零はっ！

「授業が始まりますよ。玖蘭先輩」

二人の間に険悪なムードが流れる・・・。

「って、零！！やめなさいって！」

私が零の胸倉を掴んで零に声を張り上げると零はちらつと私を見たかと思うと

「ちっ！」

舌打ちしたかと思うとその手をバツッと離れた。

「なーにー舌打ちしてんのよ！？いきなり入ってきたかと思ったら何やってるのよっ！？謝りなさい！」

そういう私を無視してそのまま歩いていった。

歩きながら、周りの生徒に一喝するのを忘れずに・・・。

「はぁ・・・ったく何やってんのよ零は・・・！っていうか何をしにきたのよ」

そこまでヴァンパイアが嫌いか・・・。まあ零の場合仕方ないんだろうけど・・・。

枢先輩はくすりと笑うと私たちに向かって

「それじゃあ二人とも頑張ってね」

そういうと他のナイトクラスを伴って歩いていった。

そして私たちも残っている生徒達を寮に帰すとその場を後にしたの
だった。

身体年齢＋精神年齢は？

月の寮でナイトクラスが授業を行っているだろう頃、私は夜の見回りを行っていた。

優姫や零とは別で見回っているため今は私一人だ。

見回っていたけどちよつと疲れたので一休みしよう。

うん。ちょうどすぐ近くに座れるところあるし・・・。

そう思つて私はどこかの建物の屋上に座ると空を見上げた。

今日も満点の空で星が輝いている。この辺りは真つ暗だから星が綺麗に見える。

はー、綺麗だなー・・・。

・・・そういえば、そろそろ原作が始まったから色々考えないといけないな・・・。

つて言つてもあれから10年たつてからそろそろ原作の記憶が色々忘れかけてやばいんだよねー！。

ふと思い出したりすることはあるし内容も全然覚えてないってわけじゃないんだけど、細かいことかは最近正直やばい・・・。

もう年かなー・・・。つてはっ！？

・・・確か、私がこっちに來たのが19歳でこっちにきたとき5歳ぐらいになっていて、現在が16で・・・って事はだ・・・。

「・・・私の精神年齢って・・・30歳!？」

くらっつと思わず眩暈が起こった・・・。

30・・・30って・・・（泣）

はあ・・・。

考えなきやよかった・・・。今更後悔。

シヨックで落ち込んでいるとガサッとどこからか僅かに音が聞こえて起き上がって上から下を覗き込むとそこには生徒が二人。

「・・・夜歩きさんはつけーん・・・」

めんどくさいなーっと思いつつもさっきのことは他所に置いて守護係の仕事を真つ当するべくそこに向かって飛び降りた。

そんなに高くなかったし、こっちに來てからも色々鍛えられているしね。

それに・・・こっちに着てから使ったことないけど「言霊」の力もあるし・・・え。忘れてたって？

そんなことないよ？ちゃんと覚えてたよ。使ってなかっただけでっ！！（誰にいつてんだ？

夜歩きさん。

木を伝って地面につくと生徒を見ると生徒は驚いた顔をしてこっちを見ていた。

「あなた達！クラスと名前を言って！夜間の外出は校則で禁止されています！夜は危ないわ。早く寮に帰りなさい！」

ピツッと腕に巻いている守護係の証を見せながら言った。

「ナイトクラスの方の写真を取りに来たのよ。いいじゃない少しくらい」

そういつて罰の悪そうな顔をする彼女たちを見ていた私は一人が膝に怪我をして血が出ているのを気づいた。

「っ！！怪我をしているの！？血はまずいわ・・・！早く寮も帰って！！」

グイッとそこ子たちの肩を押して急いで変えそうとするがはっと後ろに二つの気配。

「誰！？」

スカートの裏に隠してあった、武器（優姫と同じ場所！！）を取り出すとそれを二人に向けた。

この武器は「無限ームゲン」といい、使用者の望む武器に姿を変える特殊な武器だ。

ちなみに今は優姫と「狩りの女神ーアルテミス」と同じ形の武器だ。後ろの気配の一人、架院先輩の片手にそれを掴まれた。その後ろには藍堂先輩がいた。

「おっかねえ……。さすが理事長仕込み」

「ナ・・ナイトクラス・・ 架院暁先輩！藍堂英先輩！やだうそつ・・。」

私の後ろにいた女子生徒が喜びと声をあげるが今の状況で彼女達のように喜べる状態ではない・・。

目の前のキツつと睨み付けるかのようにみ見ると二人は肩をすくめた。

「そんなに睨まないでよ。あーあ、ちょっと血の匂いがしたから見に來ただけなのに。酷いよ 蓮華ちゃん」

「ほんと・・。ついつい見にきちゃっただけなのにさあ・・。」

その時、ふぁつと風が吹いた。

まずい。血のおいが・・！！

しかもよりにもよってその風は目の前の二人のいる方に吹いている。

「あ・・・。いい匂い・・。」

くんつつと藍堂先輩が流れてくる血の匂いを嗅ぎつけた。

藍堂先輩は目を細める。

「ああ・・・キミの血か・・・」

グツッと無限を掴む手に力をこめる。

「藍堂先輩！彼女達に一本でも指を触れたらお仕置・・・き」

そういつて^{けいせい}警醒していると藍堂先輩が私の無限を掴む手をそつと掴んだ。

「!？」

「いい匂いつて言うのは・・・」

そついつて私の掌を上に向ける。

「キミの血だよ・・・蓮華ちゃん・・・」

「それはどうもっ!!」

・・・まずい！さっき降りたときにどこかでー

グツト掴まえてる無限を引っ張ろうとするが強い力で引っ張られていて動けない。

「・・・くっ！」

まずい・・・！まだここにはデイクラスの子達が・・・！

「んー、ホント・・・そるね・・・とつても」

そういつて私の血が出ている掌に爪を立てる藍堂先輩・・・

「きつ、吸血鬼!？」

「やだ、そんなのいるわけ・・・」

その藍堂先輩の姿に顔を引きつらせる女子生徒。

まずい!!

「先輩だめです!藍堂先輩!!」

なんとか止めようと声をかけるが藍堂先輩は聞く耳持たず・・・

「・・・もつと欲しいなあ・・・首からいただいていい?」

そういつて口から私の血を流しながらいう藍堂先輩に耐え切れなくなったのか女子生徒が失神した。

その私達の様子を呆れたように下院先輩がため息を付いていた。

「だめです!あげられません!というか架院先輩求めてください!」

その時どこから現れたのか零が自身の武器である「血薔薇の銃ーブラッディローズ」を藍堂先輩の米神にあてた。

「学内で吸血行為は一切禁じられている。血の香りに酔って正気を失ったか吸血鬼」

「零ダメ!!」

「へえ・・・でももう味見しちゃった」

藍堂先輩はそれに口に付いた血をふき取りながらいった。

まずい!!

「零!!」

ドンツつとその場に銃声が響いた。

私はなんとか零の銃をもつ手を上に上げること成功して安堵の息をついた。

「びつ、びつくりしたーっ」

「ばか!ほんとに打つなんて何考えてんのよ!!」

零が撃ったその銃の弾はちょうど 架院先輩がいたその木の後ろに当たっていた。

「・・・おいおい」

それを架院先輩が冷や汗を流してみていた。

枢先輩の登場！

「その『血薔薇の銃ーブラッディローズ』・・・おさめてくれないかな」

コツツと僅かに足音を立てながら枢先輩が現れた。

「僕らにとってそれは脅威だからね・・・それとこの痴れ者は僕が預かって理事長のお沙汰をまつ」

グイッつと藍堂先輩の襟首を掴んで言う枢先輩。

「玖蘭寮長つ・・・」

「いいよね錐生くん」

「零・・・」

私が零を見ると零は機嫌悪そうに答えた。

「・・・連れて行ってください・・・玖蘭先輩」

それを聞くと枢先輩は今度は架院先輩に向く。

「架院、なぜ藍堂を止めなかった？君も同罪だ」

頭を抱えている架院先輩だけど・・・うん。同罪だね。私止めてっ
ていったのに止めなかったし傍観してただけだしね！！

「蓮華。そちらの生徒の記憶はどうする？・・・こちらで？」

話かけられてはつつとした私は枢先輩に向き直った。

「いえ。大丈夫です、理事長が今夜の記憶は無かったことに・・・。
かわいそうですけど・・・。」

ちらつと女子生徒を見る。

「そう・・・じゃ、後は頼むけど・・・。怖い思いをさせてごめんね。
蓮華。大丈夫？」

心配そうに私を見る枢先輩に私は笑った。

「大丈夫ですよ。少し齧られただけですし、もう血も止まっています
から！」

「そう、よかった・・・それじゃあね」

そうやさしく笑って帰っていく枢先輩・・・と藍堂先輩と架院先輩だ
った。

ふう・・・と一息ついていると他のところを回っていた優姫がこちら
に走ってきた。

「蓮華！？その手どうしたの！？怪我したの！？」

私の手を見て慌てている優姫に大丈夫って伝えてさっきのことを説明
しつつ部屋に戻った。

聖シヨコラトルデー

さてさてさて、皆さんおはようございます！！

今日は女子にとっては待ちに待った日でございます!! (誰!?)

そう、今日は2月14日！聖シヨコラトルデー！（バレンタインデー）

と、言うわけで今日は朝から女子生徒が「月の寮」の正門前に詰め掛けています（汗）

彼らはヴァンパイアなので陽が出ているこの時間帯は出てくるはずもないし今頃寝ている時間帯だろう。

そんな時間に女子生徒が門の前に居ると言うことは守護係である私たちまでもがそれを止めにこなくちゃいけないわけで・・・。

うん。正直にいうとめんどい！！&眠い！！

私ね、低血圧で朝は駄目なんだよ！

朝っぱらから疲れるようなことをさせるな！って思うようん！

若い子には30過ぎたおばちゃんは付いていけないよもう……はあ。（結局一日考えていた人）

[illegible]

そんなことを考えていたら門の壁に上って笛を吹いて女子生徒を止めている優姫を見る。

優姫がんばってるなゝ・・・。

私はそんな元気が朝から出るわけもなくボーと見ているだけ・・・。

というか、優姫。キミは彼らがヴァンパイアだって知っているんだから寝ていることもわかってるよね？

そこを止めるためとはいえそんなに勢いよく笛を吹いちゃって・・・。

夜中に外で騒がれているみたいなものだよ？

迷惑だよな。そこのところわかっててやってるの？

・・・あゝ・・・駄目だ駄目だ・・・。

朝からこんなことをさせられてイライラして優姫に当たってしまってるなあ・・・。

・・・よし、教室いつて授業始まるまで寝るか・・・。

そう思うと後ろで騒いでいる女子生徒と頑張ってる優姫を置いて元着た道を戻る。

「あーーーーー！！ちょっと蓮華！どこいくのよ！手伝ってよ！」

ちやうど帰る私を見つけた優姫は叫ぶはそれにヒラヒラと手を振っ

てその場を後にした。

心の中で優姫と後から駆けつけた零に声援を送って・・・。

がんばれ、二人とも私は寝る！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1991y/>

突然トリップ inヴァンパイア騎士

2011年11月17日19時49分発行